



カントウータ

Cantuta

No. 64



ラパスのロドリゲス市場 撮影：風景写真家 松井 章

1. ボリビア画家列伝【4】 Raúl LARA TORREZ 風樹 茂
2. 日本人移住地訪問記(7) オキナワ再訪 松井 章
3. Un sueño hecho realidad en una nueva tierra llamada Japón
..... Ignacio Cueto Yorimoto
日本という新天地で叶えた夢 イグナシオ・クエト・ヨリモト
4. ボリビア外務省からの感謝状で連想したこと 渡邊 英樹

一般社団法人日本ボリビア協会
ASOCIACIÓN NIPPON-BOLIVIA

1. ボリビア画家列伝【4】

Raúl LARA TORREZ

作家・ジャーナリスト

風樹 茂

EMUSA, PRADOにて

夕暮れ時にラパスの大通りであるAvenida 16 de Julio(El Prado)の画廊のEMUSAを訪れた。1988年の5月だったと思う。さほど大きくない画廊だったが、当時のボリビア美術の展示・販売の中心的役割を果たしていた。その後、経済の混乱に堪えきれず90年代の後半に閉めてしまい、今はもうない。

陳列された美術品を見て回っているうちに、「わあ、なんて美しいの!」という叫びにも似た声が聞こえた。声のありかに行ってみると、二人の着飾った恰幅のよい女性が壁にかかった小品(縦横19 x 27cm)を見ている。私も一瞬で魅了された。



写真1-1 夕暮れ時

夕暮れ時のアンデスの小村の光景のようだ。昼と夜のどっちつかずの微妙な時間帯に爛れたような夕焼けが空を覆い、2羽のコンドルが頭上を舞っている。左奥には壁の崩れた廃屋がみすぼらしい姿を晒している。中央に立つ若い女性は先住民ではない。メスティーソか白人。自由で刺激的な低地サンタクルスのような都会に憧れている。目にはサングラス。何を見ているのだろうか？ 何が見えないのだろうか？ でも帽子は先住民のもののようだ。

繁みの中には男性が隠れている。女性を見ていないふりをしているが、流し目を送っている。今にも何か不思議な物語が始まりそうである。

詩的だ。頭ではなく心に訴えかけてくる絵だ。手に入れようか？ だが小品のくせに値札は高価である。でも、女性が購入してしまうかもしれない。まるで競売会場にいるような思いで、私はこの絵を購入した。

Raúl LARA TORREZ宅を訪れる

画廊で聞くと、作者のRaúl LARA(オルーロ出身)はこの時代すでに、ボリビアを代表する画家、いわゆる大家であった。数日後、自宅を訪れた。電話でコンタクトすると食事に招かれたのである。彼はAvenida 16 de Julioにあるタワーマンションの上階に住んでいた。一瞬の飲み友達となったアルト・ラパスに住むDavid ANGELESとは経済的には大きな違いがある。

彼は48歳で私とは20歳ほどの差があった。小綺麗な部屋には彼の作品があちらこちらに飾られていた。確か子供や妻を含めた家族と食事をした。私は何を話したかあまり覚えていない。何を食べたかも覚えていない。場所柄もあり、お行儀よく、しゃちほこばらなければならなかった。怒鳴ったり、殴り合ったりするわけにはいかなかった。同じオルーロ出身のMaclovio MARCONI(ボリビア画家列伝【2】)は闘士風だったが、彼は穏やかな性格に思われたし、政治的なモチーフは絵画にないようだった。



写真1-2 画家Raúlと彼の絵画 自宅にて

彼との話で記憶に残っているのは、
—アルゼンチンのJujuyとBuenos Airesで美術を学んだ
—兄のGustavo LARA TORREZ も著名な画家であり、その影響下絵画を描くようになった
—絵画には地底に住む神にも悪魔にもなりえるスーパイ (Supay) が度々登場する

あたりさわりのない話をしながら、私は部屋に飾られた作品をカメラで撮ることに忙しかった。Raúl LARAの作品は当時流行っていたマジックリアリズムの一種だと評されていたが、私にはもうひとつピンとこなかった。たとえば小説の『百年の孤独』(ガルシア・マルケス)などとはかけ離れているように感じた。むしろMaclovioのほうに私はマジックリアリズムを感じた。

つまり、アルゼンチンにいたせい、かヨーロッパの匂い、か強い。ボリビアの根にある土着性を感じない。といってアルゼンチンのブエノスアイレスが擬似西欧でしかないように、彼の作品はヨーロッパ絵画そのものでもない。何か難解である。

私はせっかく家まで訪れているので、彼の作品をもう一品購入(暗号の絵画・筆者命名)した。絵の中の若い女性は赤頭巾、2角帽子をかぶっているのはナポレオンだと目星をつけたが、天使を除いて他の人物の意味がもうひとつわからない。

Raúl LARA の難解な絵の謎に挑むには、兄弟、アルゼンチン、アンデスの神、西欧という複雑な4次方程式を解く必要があった。

兄弟と壁画

兄のGustavo LARA TORREZ(1934年、Huanuni, Oruro, Boliviaで生まれ、2014年 Oruroにて死す)も著名な画家である。弟のJaime Rafael LARA(1946年、Oruro, Bolivia生まれ、1976年San Salvador de Jujuy, Argentinaで死亡したと推測される)も多分そうなるはずだった。

Raúl は兄Gustavoの影響下、絵画の道に進む。出発は兄弟ともに壁画家である。1950年～60年にかけて、ボリビアではいまだメキシコの壁画運動の影響が強かった。ましてや鉱山街のオルーロ出身である。Maclovioの作品にみられるように、絵画は政治や社会主義運動と切り離すことはできない。



写真1-3 暗号(著者命名)

兄のGustavoが1952年に作成した絵画がラパスの国立美術館に所蔵されているという。それらの絵画の題名が絵のモチーフを物語っている。

- 「死の黄昏(Crepúsculo de muerte)」
- 「ボリビアの国家反逆者(Bolivia de la antipatria)」
- 「反逆(Rebelión)」
- 「鉱夫の家族(Familia minera)」
- 「鉱夫と息子(Minero con su hijo)」
- 「労働者(Los obreros)」

アルゼンチンへ移民

1955年 RaúlらはGustavoに連れられてアルゼンチンに移住する。Gustavo 21歳、Raúl 15歳、Jaime 9歳。彼らはオルーロからウユニを経て国境の街ビジャンノに着き、アルゼンチンに入国し、アンデス山麓のSan Salvador de Jujuyに住み着いた。国境からバスで4時間ほどの緑の多い自然豊かな街である。

1988年に私も鉄道とバスで同じ経路をたどった。当

時ウユニはただの寒村でしかなかった。アルゼンチンに向かうボリビア人は中年の出稼ぎだったり、若い留学生だったり様々だった。Jujuyはアルゼンチン北部の街であり、インディオ系、アンデス系の文化が浸透していて、ブエノスアイレスとはまったく別の文化圏である。ブエノスアイレスなどと比較すると先住民の血が入ったボリビア人にとっては馴染みやすいところだったのだろう。演劇を学びに行く20代の男性は「アルゼンチンは南米のカルチャーセンターだよ」と言っていた。

Jujuyで降りたのは少数で、多くはブエノスアイレスへ向かった。芸術を目指すボリビア人がアルゼンチンを目指すのは不思議ではない。だが社会主義運動の一派でもある壁画家で名を成そうとする彼らが憧れるにはもうひとつ理由があった。1946-55年にかけて、フアン・ペロン大統領が政権にあり、労働組合が支持母体だった。現在に至るペロニズムの時代の幕開けである。

彼らは55年の9月19日以前にアルゼンチンに出発したものと推測される。なぜならば、この日軍部のクーデターによりペロン政権は倒され、ペロン本人は他国へと亡命したのだから。その後アルゼンチンは反ペロン主義の軍政とペロン側に立つ民政がしばらく交互に繰り返される。

アルゼンチンは政治的には長らく不安定で、元祖分断国家である。戦後、世界の食糧基地となったアルゼンチンは一時裕福だった。その時代の大統領ペロンは妻のエバ・ペロンとともに、人口の多い労働者のためのポピュリズム的独裁政権を続けており、知識人、マスコミ、土地貴族などの金持ちを弾圧し、貧乏な庶子でも贅沢三昧の生活ができることを示し、労働者に夢を与えた。結局ばら撒きの放漫財政で国庫を空にし、その後の20年近い混乱の時代の端緒を作った。中道がなく、労働者側の社会主義あるいは資本家側の自由経済と左と右に大きく振れる社会である。

ペロンが去った後も社会の底流に流れる労働組合運動は生き残る。彼ら兄弟も壁画を中心とする芸術を追求した。Raúlは1961年に奨学金を得て、ブエノスアイレス

のEscuela Superior de Bellas Artes Ernesto de la Cárcovaで学ぶことになる。専攻は壁画だが、受けたのはメキシコ的というよりは、アカデミックな西欧美術教育である。卒業後、壁画運動家として活動をつづけた。

ところが大きな転機が1976年にくる。アルゼンチンでは政策が揺れ動く中、経済はひた迫し、反ペロン主義の軍政に対して都市ゲリラが跋扈する。そんな中、73年にペロンが復帰した。それもつかのまで、翌年には病死。パナマのナイトクラブで踊り子をしていた3番目の妻(副大統領だった)が大統領職を継いだ。

が、政治的能力に乏しく1976年3月に軍事クーデターで倒れ、ホルヘ・ラファエル・ビデラ将軍が大統領に就任する。今にまで影響の残る「汚い戦争」が開始された。都市ゲリラ、労働組合員、左翼傾向があるとみなされた画家、詩人、作家などが拘束され、行方知れずとなった。多くは拷問死したと推測されている。その数3万人か。

この過程で餌食になったのが、Jujuyに残り画家兼美術教師としての活動を続け、画家仲間の労働組合運動にも従事していた弟のJaime Rafael LARAである。5月28日、展覧会中に官憲に捕捉され、一度釈放されたらしいが、その後誰も彼を見た人間はいない。

失踪者のリストである「記憶の公園: 国家テロの犠牲者の追悼碑(Parque de Memoria : Monumento a las víctimas del terrorismo de estado)」の5438人目に顔写真つきで掲載されている。

<https://basededatos.parquedelamemoria.org.ar/registros/5438/>

同じような活動に従事していたRaúlやGustavoにも身の危険が迫ったことは想像に難くない。

作風の大変化

1977年、彼らは22年間に及ぶアルゼンチンでの生活を断念し、祖国ボリビアに帰国。ラパスに腰を落ち着ける。Gustavo 43歳、Raúl 37歳。



写真1-4 オルロのカーニバル

https://www.facebook.com/photo?fbid=4494380827243521&set=pcb.4494388187242785&locale=ja_JP より

この年、ボリビアはウーゴ・バンセル将軍の軍事政権(1971年8月クーデターで成立)の末期にあたり、政治経済情勢は緊迫していた。

そんな中、Gustavo は政治的なモチーフを捨てなかった。絵画よりも銅像を好んで作ったようである。独立の影の英雄 Juana Azurduy de Padilla の銅像が El Alto 市に残っている。

一方、Raúl は政治的な表現をきれいさっぱり捨てた。壁画やその様式にそって描いてもそれは神話や民族や祝祭をモチーフとしたものである。彼が駆使したのは、ブエノスアイレスで身につけた西欧的な技法や画風である。心情的には、兄弟が画業で協力していたファン・ゴッホに親近感を持ち、技術の面では、歪んだ顔や肉体を描いたアイルランドのイギリス人画家のフランシス・ベーコンの影響を受けた。新たに付け加えたのはオルロという土着文化にある祝祭や神話性である。しかし絵画には西洋の人物や歴史が唐突に登場する。

ラウルの画家としての心情に分け入ってみる。「西欧は捨てがたい」、「しかし自分のルーツはオルロという土着文化にある」「弟の Jaime は政治に殺された」。

ここで唐突に私が思い出すのは、迷宮の作家といわれるアルゼンチンのホルヘ・ルイス・ボルヘス(Jorge Luis Borges, 1899-1986)である。日本を訪問した1979年に私の恩師である牛島信明教授が長いインタビューを行っている。牛島氏は「アルゼンチンのような社会ではメタファーが発達する」と作家が語ったと私に告げたのだが、その言葉が妙に記憶に残っている。

Raúl が選び取ったのは、メタファーだった。絵画の背後には政治社会的な意図が暗号のように隠されている。だからこそ難解なのだ。

(なお、日本の歴史や伝統を西洋画の技法で西洋人の姿で幻想的に描いた日本人画家にレンブラントに強く影響を受けた牧野邦夫(1925-86)がいる)

再鑑賞・評価

私は低地に住んでいたこともあり、アンデス高地の神話や風俗には疎い。アイマラやケチュア系の友人もいたが、酒飲み友達でバカ話をした思い出しかない。また、日本でそれらの分野の書籍を逍遙してみたが、ほとんど見つからなかった。だから、私の感想はピント外れかもしれない。が、絵画の鑑賞は自由なので購入した2作品を大胆に再評価してみる。

◇夕暮れ時(19cm×27cm)

登場人物も多くなく、まだわかりやすい。

背景はアンデスの廃村であり、崩れかかった家は、歴史の波間で崩壊した基礎共同体だ。女性はそんな村を捨て、都会や欧米に憧れている。かぶっているのは欧米から持ち込まれ、その後先住民の女性に定着した山高帽である。

彼女はサングラスをかけているので、現実を直視しているわけではない。憧れるのは美化された都会だ。様々な願望が心身で渦巻いている。繁みの中の男は地底に住むスーパイである。彼は女性の様子をうかがっている。誘惑する機会を狙っているのかもしれない。頭上に舞っている二羽のコンドルは本来守護人であるが、監視しているだけで女性を守るための行動をとりそうにない。夕暮れ時は生と死の境界にあたる。これから悲劇的なことが始まりそうな予感に充ちた絵である。

◇暗号(27 x 37cm)

登場人物も多くまさに難解である。明確に描かれている左の女性は赤頭巾に違いない。赤頭巾はお使いから戻ってみると、家が占拠されている。だが驚いた様子はない。彼女は裏切ったのだ。

時は1988年のボリビア。30年前は社会主義革命の旗手であった大統領のビクトル・パス・エステンソーロは、君子豹変するかのように、30年以上も前に自分が作った労働組合を戦車まで出動させて弾圧するようになった。もっと長い目で歴史を俯瞰すると、16世紀初頭のメキシコが思い出される。メキシコの先住民のラ・マリンチェ(La Malinche、別名:マリナ)。スペインの征服者エルナン・コルテスの通訳兼愛人となり、アステカ帝国の滅亡に決定的な役割を果たす。赤頭巾は前述の「夕暮れ時」の少女が成長した姿かもしれない。

背後に姿を現す二角帽をかぶるナポレオンは、欧米の象徴だろう。IMF・世銀からなる新自由主義的構造調整を受け入れるように強い圧力をかけている。

さて、少女は赤頭巾の妹に違いない。悪魔であるスーパイにだっこされ、身体をこわばらせている。軍人はサングラスをかけており、真の事実を見ていない。ナポレオン

と提携しているようだ。天使は本来守護人だが、コンドルと同様に傍観者でしかない。この家庭を救うことはない。この家庭(閉ざされた部屋=海のないボリビア)は国そのものだ。1980年代後半のボリビアののっぴきならない政治経済社会情勢が反映されている。

こう見ると、同じオルーロ出身のMaclovioとは対照的である。より直接的に政治を描いた彼は自由に展覧会で自作を発表できないし、サインするにも危険が伴った。

Raúlのメタファーを使った戦略は、南米や欧米でも大いに評価され、画家として早いうちに花が咲いた。Raúlの死後(2011年)、コチャバンバとラパスにて大回顧展が開かれている。

La Patri紙 オルーロの追悼記事

以下はRaúl死去の翌日2011年8月23日(火)の地元紙の追悼記事である。

「ラウル・ララは、その民衆の本質をキャンパスに刻んだオルーロ人であった」

国内外で数々の賞を受賞したRaúl LARA TORREZは、オルーロ出身の著名な造形芸術家であり、伝統を重んじ、フォルクローレを愛し、神々への敬意を忘れない民衆の本質を描き出した。彼の才能は、歴史のページと壁画の中に永遠に刻まれるだろう。Raúlは1940年、オルーロのサン・ホセ鉱山地区に生まれ、昨日コチャバンバ市で亡くなった。当地では弟子、家族、友人たちによる追悼式が行われる予定である。

彼の芸術活動は1952年、故郷オルーロで兄Gustavoとともに始まった。その後、弟とアルゼンチン・ブアイで活動したことを契機に、彼の人生は大きく転換した。芸術への情熱に導かれ、彼はアルゼンチンのブエノスアイレスへ移住し、14年間滞在した。そこではカスタンニョやウルチュアの工房で学び、さらに「エルネスト・デ・ラ・カルコバ高等美術学校」においてフレスコ技法の知識を深めた。

彼はアルゼンチン国立芸術基金(Fondo Nacional de las Artes)の奨学生でもあり、大学施設や劇場などで様々な技法による壁画を制作した。また、ブエノスアイ

レス連邦区の「エスティロ美術協会」で役員および教師を務めたほか、ボリビアとアルゼンチンの高等教育機関・大学でも教鞭を執った。

受賞歴

この卓越したオルーロ出身芸術家の主要な受賞歴として、以下が挙げられる。

1964年 プエノスアイレス市「エドゥアルド・シボリ」サロン 第3位

1974年 アルゼンチン北東部サロン(フワイ)第1位

1974年 フワイ州「アントニオ・フェルナンデス・オテロ」サロン 第1位

1977年 第2回INBOビエンナーレ「現代ボリビア絵画」満場一致による第1位

1977年 ラパス市主催「第25回ペドロ・ドミンゴ・ムリーヨ絵画サロン」第1位

1977年 コチャバンバ全国サロン 第1位

1981年 ウルグアイ・マルドナード開催「第4回ラテンアメリカ素描・版画ビエンナーレ」第1位

1983年 解放者シモン・ボリーバル生誕200周年国際絵画コンクール 第1位

1984年 アルゼンチン共和国第17回全国サロン(サン・ミゲル・デ・トゥクマン)第1位

さらに彼は、ボリビア、アルゼンチン、チリ、ウルグアイ、ペルー、スウェーデン、アメリカ合衆国などで個展・合同展を開催した。

彼の作品を収蔵する公共コレクションは、ボリビア、アルゼンチン、テキサス、メリダ、ブラジル、ウルグアイ、アメリカ、ヨーロッパの主要美術館に存在している。

美術史家のTeresa GISBERTは1985年、次のように評している。

「Raúl LARAが描くのは、疑いなく彼自身の内的世界である。しかしそれは同時に、私たち自身の世界でもある。それは集合的意識を暴き出す世界であり、高地の人間

の意識である。急峻な坂道、返済不能の借金、不衛生な部屋に閉じ込められながらも、音楽と踊りの飛翔の中で変貌していく人間たちの世界なのだ」

連載を終えて

今回紹介した絵画は、1988年前後に作成されたものである。この年、前述したように、ボリビアでは構造改革が行われ、一時成功したかに見えたが、その後のコチャバンバでの水戦争(水道の民営化反対運動 1999~2000年)などの発生を見ると、長期的には成功とはいえない。ボリビアのプログラムをたった2週間ほどで作り上げたという当時30歳前半だった経済学者ジェフリー・サックス(コロンビア大学教授)は今更ながら、「あの改革や政策は失敗だった。国内のことを知らずにやってしまった」と回顧し、最近ではグローバリズムに反対の立場である。

なお89年にベネズエラ(筆者数年駐在)でも同様の世銀・IMF主導の構造調整を実施した結果、カラカッソと呼ばれる激しい民衆暴動と軍による虐殺が発生し、それは新たな政権樹立の遠因となり、現在のベネズエラに至っている。

こうして長い期間、世界の一部は、社会主義か新自由主義かの両極端な政策の中で、軋み、混乱してきた。88年はその先駆けでもあった。そのような混迷期に画家たちは、いかなる絵画を作り上げ、どう画家としての道を切り開いていったのか。それが知りたくて4名のボリビアを代表する画家とその作品の断片を描いてみた。

本誌で連載できたことは光栄だった。編集作業で協力いただいた細萱恵子さんに感謝する。メキシコ他中南米への旅たちをまもなく控えて。

風樹茂

2. 日本人移住地訪問記(7) オキナワ再訪

風景写真家
松井 章

◆「おかえりなさい」

サンフアン移住地から、約2時間ほどでオキナワ移住地を再び訪れました。前回とは異なり、ここも周囲が青々として雨季が始まっていることが一目で分かります。到着早々に、前回畑のあちこちをご案内くださった比嘉徹さんが迎えに来てくださいました。「おかえりなさい」という沖縄的な歓迎のお言葉をいただき、比嘉徹さんのピックアップトラックに乗り農場へ向かいました。

◆南米の大地の広がりの中に沖縄的な懐かしさを感じる



まず案内していただいたのは、ゴルフ場としても使っているという、芝生の広がる草原でした。熱帯らしい燃えるような夕日が空を染め、私はしばらく夢中でシャッターを切りました。

前回の訪問時に聞いたことですが、オキナワ移住地の風景には、南米の大地の広がりの中に、どこか懐かしい「沖縄的な空気」が不思議に同居しているということです。人々がこの地で開拓する中で、形作られた景色なのでしょう。

夕日を見ながら、かつてこの地にダム建設の計画があったという話を聞きました。天水に左右される農業から脱却できるということで、移住地では大きな期待が寄せら

れていたそうです。しかし、残念ながらその計画は頓挫してしまいました。その後は、ダムがなくても収穫しやすく、利益率の高いサトウキビなどの作物を栽培するようになり、農業の形を工夫しながら現在に至っているといえます。

オキナワ移住地では、かつて陸稲から農地を切り開いた歴史があります。しかし、なかなか思うように収量が上がらず、牧畜に取り組んだ時代もあったそうです。その後綿花栽培が移住地の大きなプロジェクトとして始まりましたが、急激な気象の変化により、大きな挫折を経験します。

土地を離れる人々も少なくなかったですが、作物を変え、方法を変えながら、農業を続けてきました。1980年代には大豆栽培が広がり、移住地が次第に豊かになっていく時代も迎えます。オキナワ移住地の歴史は、単に農作物の変遷というだけではなく、自然条件と向き合いながら、何度も立て直してきた人々の歩みそのものなのだと感じました。

夕食をいただきながら、この日はさらにいろいろなお話を伺いました。なかでも印象的だったのは、4年に一度、沖縄県で開催される「世界ウチナンチュー大会」への思いです。世界各地に移り住んだ沖縄出身者やその子孫が、このときには沖縄に集います。比嘉さんの話を聞いていると、それは単なる交流イベントではなく、世界に広がった沖縄の人々が、自分たちの根を確かめ合う大切な機会なのだと伝わってきました。

ボリビアに暮らし、日本語とスペイン語を話し、南米で農業を営みながらも、彼らの心の中には沖縄との強い結びつきがある、だから頑張れるのだと思いました。移住から長い年月が過ぎ、世代が変わっても、「ウチナンチュー」であることは、今も大切な誇りとして受け継がれているようでした。

◆移住地の一日の始まり：朝焼けのさとうきび畑



翌朝は、夜明け前に再び比嘉徹さんが迎えに来てくださいました。そして、前回同行してくれたJICAの河内華さんも合流しました。まだ空が暗いうちに農場へ向かい、若木のサトウキビが繁茂する畑で日の出を待ちました。この日もまた、空は真っ赤な朝焼けに彩られました。熱帯の大地から太陽が昇り、サトウキビの葉に光が差し込む光景は、オキナワ移住地の一日の始まりを象徴しているようでした。

◆地平線まで続く大豆畑



その後は、大豆畑へ向かいました。地平線まで広がる畑には、大豆の新芽が整然と、どこまでも続くように生えていました。日本ではなかなか目にすることのない、大規模農業の圧倒的な広がりです。

▲比嘉徹さん：記念切手をお渡ししました

比嘉さんは、大豆はその年の降水量や気温に大きく左右されるため、「まるで博打のようなものだ」と笑って話して



いました。実際に、大豆は国際価格で取引され、ドル決済となるため、売るタイミングによって利益も大きく変わります。自然条件だけでなく、国際市場の動きも農業経営に直結する。その話を聞きながら、オキナワ移住地の農業が、単に土地を耕す仕事ではなく、世界経済ともつながる大きな営みであることを実感しました。

◆巨大な農業機械がずらりと並ぶ



巨大な農場を再び車でしばらく走ると、農業機械を置く倉庫に着きました。壁に囲まれた広大な敷地は、かつて比嘉さんのご自宅があった場所だそうです。そこには、日本では見たこともないような大型の耕運機や農業機械が何台も並び、スタッフの方々が整備をしていました。

前回の訪問でも感じたことですが、ボリビアの2つの移住地の農業は、私が日本で想像していた「農家」という言葉のイメージを大きく超えるものでした。畑の広さ、機械の大きさ、そして経営判断のスケール。その一つひとつに、南米の大地に根を張ってきた移住者たちの苦勞と歩み

が重なって見えました。

◆移住地でいただいた日本食



大規模農業の現場を再び体験させていただいた後はオキナワ移住地の中心部にある比嘉さんの現在のご自宅で、日本食をごちそうになりました。遠くボリビアの地でいただく日本の味は、どこか不思議でありながら、格別に味わい深いです。ここに暮らす人々にとって、日本や沖縄は日々の食卓や言葉、家族の記憶の中に今も息づいているのだと感じます。

◆ドラゴンフルーツの収穫



食後には、奥様と一緒にドラゴンフルーツの農園も案内していただきました。サトウキビや大豆のような大規模作物とはまた違い、鮮やかな果実をつけるドラゴンフルーツの畑には、移住地の農業の多様さが表れていました。趣味で栽培しているということですが、数十本の木には、無数の実が成っています。

◆第二移住地の水田へ



その後は、広いオキナワ移住地を車で三十分ほど移動し、水田へ向かいました。真栄城豊さんが経営する農場です。太陽はすでに中天に昇り暑かったですが、風が吹き入道雲が流される、気持ちのよい田園風景が広がっていました。

広大な水田には、田植えを終えたばかりの若い稲が、果てしなく続くように並んでいました。南米の大地に広がる水田という光景は、どこか不思議でもあり、同時に日本人にとっては懐かしさを感じさせるものでした。

◆少人数で広大な田園を管理している大規模農業



オキナワ移住地のお米は、ボリビアで広く親しまれています。ボリビアの市場へ行くと、布袋に「OKINAWA」と記された米が量り売りされている光景を、各地で目にすることができます。それほどまでに、オキナワ移住地の米はこの国の食卓に浸透しているのです。その背景には、ここで積み重ねられてきた農業技術と、広大な水田から生み

出される大きな収量があります。

◆あぜ道を4WDで豪快に走る



これから作付けをする、水の入っていない水田では、肥料のようなものを積んだ散布車が稼働していました。ぬかるみに沈まないよう細い車輪を備えた車両で、粒状の肥料を撒いているようでした。水田といっても、日本で見る小さな田んぼとはまったくスケールが異なり、作業の一つひとつに大規模農業ならではの工夫がありました。

また別の水田では、大きなホースで水をくみ上げていました。これから溜池から大量の水を引き込み、水田へ流し込むのだそうです。乾季にはなかなか雨が降らないこの地で、水という資源がどれほど貴重なものか、現場を見て改めて実感しました。

◆真栄城豊さん

水が入り、風が強い稲の上を吹き抜けていく風景は、とても瑞々しく、爽やかなものでした。強い日差しの下に広がる水田には、南米の大地の力強さと、日本から受け継がれた稲作の記憶が重なって見えるようでした。

今回は、この水田を見学した後、オキナワ移住地を後にしました。サトウキビ畑、大豆畑、ドラゴンフルーツの農園、学校、商店、そして水田。短い滞在ではありましたが、移住地の人々が長い年月をかけて築いてきた暮らしと農業の広がり、改めて深く心を動かされました。

雨が降り、地面からは熱帯特有の匂いが立ちのぼります。そうした瞬間に、ここがアマゾンの奥地にあることをあらためて実感しました。

遠い異国の地へ渡り、農業を続けてきた日本人の暮らしは、この大陸が持つ多様な一面を物語っています。写真を撮りながら移住地を歩いていると、日本と南米という二つの場所が、静かにつながっているように感じられました。



《公開講座》

「ボリビアと日本の絆 ―日本人移住地：サンフアンとオキナワの道のり―」

- ・日時:7月5日(日)14:00～15:30
- ・会場:JICA横浜 1階 会議室1
- ・参加無料／定員30名／事前予約制
- JICA横浜WEB→ https://www.jica.go.jp/.../infor../event/1582594_23965.html
- 海外移住資料館WEB→ https://www.jica.go.jp/dome.../jomm/event/1582592_24070.html

《7月25日:南米フォトトーク》

『ペルー・アンデスのアルパカ』

- 日時:7月25日(土)11:30～12:30
- 会場:(株)ケンコー・トキナー
- ◎事前予約制・入場無料(定員18名)

3. Un sueño hecho realidad en una nueva tierra llamada Japón

Sociedad de Responsabilidad Limitada
Yomoto Construction
Ignacio Cueto Yorimoto

Nací en Trinidad, Beni, Bolivia, hijo de mi padre boliviano llamado Miguel Cueto Justiniano y de mi madre nikkei, Guillermina Yorimoto Roca. Viví en Bolivia hasta los 35 años.

17 de junio de 1992.

Ese día llegué a Japón. Un país completamente nuevo para mí.

Recuerdo cómo me sentía: con ganas de salir adelante, con sueños grandes, pero también con un profundo temor de enfrentarme a una cultura tan distinta a la nuestra.

No sabía el idioma, no conocía a nadie, y no sabía si verdaderamente iba a poder construir una vida aquí.

Aun así, di el paso. En aquella época, Japón estaba atravesando el estallido de la burbuja económica, pero aun así podía obtener mejores ingresos que trabajando en Bolivia. Por eso imaginaba muchos sueños. Una vez que me estableciera, planeaba traer también a mi esposa y a mis tres hijos a Japón.

En aquella época las cosas no eran como ahora. No había teléfonos inteligentes, no había traductores automáticos, y la

comunidad latina era muy pequeña.

Cada trámite era un reto, cada estación de tren, cada conversación, cada señal escrita en japonés... todo significaba un desafío nuevo.

Pero con esfuerzo, paciencia y fe, seguí adelante. Desde el principio trabajé en construcción. Fueron trabajos duros, largos, pesados, donde el cuerpo se cansaba y el clima tampoco ayudaba. Hubo días de frío intenso, días de calor fuerte, y días en los que las fuerzas se me iban. Tuve tropiezos, momentos de duda, y situaciones difíciles.

Pero siempre me repetía a mí mismo: "Un día más. Un paso más. No vine a Japón para rendirme."



Foto3-1 En primera fila, el autor en el centro, ; a la izquierda, su esposa; y sus tres hijos

Más adelante logré traer a mi familia. Mi esposa, y mis tres hijos, que aún estaban en la primaria cuando comenzaron a asistir a escuelas Japonesas. Ellos también habían sido educados en

español, así que imagino que les resultó muy difícil seguir las clases en japonés.

Y mientras avanzaba, fui aprendiendo el idioma, adaptándome a las costumbres japonesas, y encontrando mi lugar en este país que, con el tiempo, se convirtió en mi hogar.

Mi mayor motivación siempre fue mi familia. Mi deseo más grande era que mis hijos estudiaran, que tuvieran oportunidades, que fueran más lejos de lo que yo pude llegar.

Cada jornada de trabajo, cada amanecer en la obra, cada esfuerzo... todo lo hacía con ese sueño en mente.

Con los años, ese sueño se cumplió.

Mis hijos crecieron, estudiaron y se convirtieron en profesionales. Y juntos logramos algo que jamás imaginé cuando llegué a Japón: crear una empresa familiar.

Nuestra empresa: Yorimoto Kensetsu.

El 2 de febrero de 2015 nació nuestra empresa Yorimoto Kensetsu en Toyokawa, Prefectura Aichi. Una empresa familiar dedicada al área de construcción, especialmente a la construcción de exteriores de viviendas, el diseño de exterior y la reforma de exterior.

Nuestro objetivo siempre ha sido ofrecer

un trabajo honesto, detallado y de alta calidad, dejando una huella positiva en cada proyecto.



Foto3-2 La bandera de la empresa

Lo que comenzó como un sueño se convirtió en una realidad gracias al esfuerzo de mis tres hijos.

Hoy mi hijo Segundo, José Miguel trabaja como CEO, liderando la empresa con visión y disciplina.

Mi hijo mayor, Carlos Hugo es Director Ejecutivo, siempre al frente de la operación y de la confianza de nuestros clientes.

Y mi hija Emilene dirige otra empresa filial de limpieza, Emi Cleaning, que complementa nuestros servicios y demuestra la fortaleza del trabajo familiar.



Foto3-3 Obras de construcción de viviendas en venta realizadas por encargo de una importante constructora

Uno de los logros más importantes que hemos alcanzado es ganarnos la confianza de grandes constructoras de vivienda de Japón, algo que jamás imaginé cuando llegué en 1992.

Ese reconocimiento habla no solo del trabajo que realizamos, sino del compromiso y la seriedad con que mis hijos conducen la empresa.

Me llena de orgullo ver cómo algo que empezó desde cero — con sacrificio, con miedo y con esperanza — hoy es una empresa sólida, respetada y con sueños todavía más grandes.

Uno de esos sueños es llevar nuestra empresa a Bolivia, para compartir allá nuestro trabajo, nuestra experiencia y nuestros valores.

Cierre

A veces miro hacia atrás y pienso en aquel joven que llegó a Japón con una maleta, con miedo, pero con ganas de

salir adelante.

Nunca imaginé que mis pasos iban a abrir el camino para que mis hijos logaran tanto.

Pero aquí estamos: con una vida nueva, con oportunidades, y con un futuro que seguimos construyendo juntos.

Quiero agradecer a mis hijos por ser mi fuerza, por caminar a mi lado y por transformar cada sacrificio en logro.

Y también quiero agradecer profundamente a mi esposa, que estuvo conmigo en cada momento difícil, luchando a mi lado, apoyándose y nunca dejándose rendirme.

Sin ella, este camino habría sido mucho más difícil.



foto3-4 Personas relacionadas con Yorimoto Construction

Y quiero agradecer profundamente a Japón, un país que me abrió las puertas, me dio trabajo, y me permitió ver a mis hijos crecer y convertirse en profesionales capaces de crear su propio

destino.

Mi historia no es perfecta, pero es una historia de lucha, de aprendizaje y, sobre todo, de amor por mi familia.

Si algo he aprendido en todos estos años es que cuando no te rindes, y cuando la familia trabaja unida, los sueños se cumplen.

Gracias por escucharme.

Gracias por ser parte de mi camino.



Foto3-5 la boda del autor

日本という新天地で叶えた夢(日本語訳)

合同会社 寄本建設

イグナシオ・クエト・ヨリモト

私は、ベニ州トリニダーでボリビア人の父ミゲル・クエト・フスティニアノと日系人の母ギジェルミナ・寄本・ロカとの間に生まれ、35歳までボリビアで過ごしました。

1992年6月17日。

その日は私の第二の人生の始まりです。私はその日に初

めて日本にやってきました。私にとって全く新しい国でした。

あの時の気持ちを今でも覚えています。前に進みたいという強い思い、大きな夢を抱いていました。しかし同時に私たちとはまったく異なる文化に向き合うことへの深い不安もありました。言葉も分からず、知り合いもおらず、本当にここで人生を築いていけるのかも分かりませんでした。

それでも、私は一歩を踏み出しました。

当時日本はバブルが弾けていましたが、それでもボリビアで働くよりは良い報酬を得られました。それで色々な夢を描いていました。一段落したら妻や3人の子供も日本に呼び寄せるつもりでした。

当時は今とは違いました。スマートフォンもなく、自動翻訳もなく、ラテンコミュニティもとても小さかったのです。あらゆる手続きが大変で、駅も、会話も、日本語で書かれた標識も、すべてが私にとっては挑戦でした。

それでも努力と忍耐、そして信念を持って前に進み続けました。私は最初から建設業で働いていました。厳しく、長時間で、体力を必要とする仕事でした。体は疲れ、日本の気候も決して楽ではありませんでした。

厳しい寒さの日も、猛暑の日もあり、力が尽きそうになる日もありました。つまずきや迷い、苦しい状況も経験しました。それでも私はいつも自分に言い聞かせていました。「あと一日。あと一歩。私は諦めるために日本へ来たのではない。」

家族も呼び寄せ、長男、次男、長女もまだ小学生でしたが、日本の学校に通い始めました。子供たちもスペイン語で教育を受けてきましたから、日本で日本語の授業についていくには大変な思いをさせたと思います。

そして前に進みながら、日本語を学び、日本の文化に適応し、この国で自分の居場所を見つけに行きました。やがて日本は、私にとって、私の家族にとって“故郷”にな

っていったのです。私の最大の原動力は、いつも家族でした。

子どもたちに勉強してほしい。

チャンスをつかんでほしい。

そして、自分が到達できなかった場所まで自分の力で進んでほしい。それが私の一番大きな願いでした。

毎日の仕事も、現場で迎える朝も、すべての努力も——その夢のためでした。

そして年月が経ち、その夢は現実になりました。

子どもたちは成長し、学び、それぞれ専門職として活躍するようになりました。そして私たちは、日本にきた当時には想像もできなかったことを成し遂げました。次男は建築関係の専門学校を出てから、建設会社を起ち上げました。

2015年2月2日、合同会社寄本建設が愛知県豊川市に誕生しました。家族で会社を作ったのです。私たちの会社——寄本建設です。住宅の外構工事、エクステリアデザイン、外構リフォームを中心とした建設会社です。私たちの目標は常に、誠実で丁寧、そして高品質な仕事を提供し、すべてのプロジェクトに良い足跡を残すことでした。

夢として始まったものが、3人の子どもたちの努力によって現実となりました。現在、次男のホセ・ミゲルはCEOとして、ビジョンと規律を持って会社を率いています。長男のカルロス・ウゴは専務として、現場運営とお客様からの信頼を支えています。そして娘のエミレーネは、関連会社である清掃会社「Emi Cleaning」を運営し、家族の力でサービスの幅を広げています。私ももちろん寄本建設で働いています。

私たちが成し遂げた最も大きな成果の一つは、日本の大手ハウスメーカーから信頼をいただけるようになったことです。1992年に日本へ来た当時こは、想像もできませんでした。その信頼は、私たちの仕事だけでなく、子どもたちが誠実さと責任感を持って会社を運営している証でも

あります。

ゼロから始まったもの——

犠牲や不安、そして希望の中から始まったものが、今ではしっかりと、信頼される会社へと成長したことを、私は誇りに思っています。

そして今、さらに大きな夢があります。

それは、この会社をボリビアへ広げ、私たちの技術、経験、そして価値観を届けることです。

時々、私は振り返ります。

スーツケース一つを持ち、不安を抱えながらも、前へ進もうとしていたあの若者のことを。自分の歩みが、子どもたちの未来への道を開くことになるとは、想像もしていませんでした。

でも今、私たちはここにいます。

新しい人生があり、機会があり、そして共に築き続ける未来があります。子どもたちには心から感謝しています。私の力となり、共に歩み、すべての犠牲を成果へ変えてくれたことに。そして、どんな困難な時も私のそばで支え、共に戦い、決して諦めさせなかった妻にも、深く感謝しています。彼女がいなければ、この道のりはもっと困難だったでしょう。

そして何より、日本という国に深く感謝しています。私に扉を開き、仕事を与え、子どもたちが成長し、自らの未来を切り開く立派な人間になる姿を見せてくれました。

私の人生は完璧ではありません。しかし、努力と学び、そして何より家族への愛にあふれた物語です。この長い年月の中で学んだことがあります。それは —— 諦めず、家族が力を合わせれば、夢は必ず叶うということです。

聞いてくださって、ありがとうございました。

私の歩みの一部になってくださり、本当にありがとうございました。

(ChatGptによる翻訳)

<https://www.facebook.com/yorimotokensetsu/photos/>

渡邊英樹当協会相談役がボリビア政府から感謝状をいただきました

渡邊英樹相談役が書かれたスペイン語対訳の「写真と俳句で見る・ボリビア開拓史・コロニアオキナワ」の出版に対して、ボリビアと日本との歴史的かつ文化的絆を深めた功績により、ボリビア政府・外務省から 感謝状をいただきました。

ボリビア多民族国外務省副大臣よりの感謝状



駐日ボリビア大使館よりの書簡



4. ボリビア外務省からの感謝状で 連想したこと

一般社団法人 日本ボリビア協会 相談役

渡邊 英樹

拙著に対してボリビア多民族国外務副大臣より感謝状を頂きました。要訳しますと以下の通りです。

.....

ラパス、2026.4.22 在日本大使館を通じ、『写真と俳句で見るボリビア開拓史』を受け取りました。貴重な本の発行に対し厚くお礼を申し上げます。コロニアオキナワはボリビア東部の農産物の基盤作りと発展のために際立った役割を果たされました。これはボリビアと日本の歴史的な絆の証です。我々は、両国の友好と相互理解のための貴殿の顕著な働きを心に留めております。

外務副大臣 Carlos Paz Ide

身に余る光栄なこととありがたく感じておりますが、実はその感謝の気持ちとは別なことで、私は、まったく勝手な想像を膨らませていたのです。

それは、副大臣のお名前が Carlos Paz Ide 様であったことによります。というのは、Paz という苗字はボリビア人であれば、ほとんどの人が民族主義革命運動(MNR)の指導者として1952年から四期にわたり大統領を務め、ボリビアの近代化を推進した偉大な政治家である Ángel Víctor Paz Estenssoro 大統領を思い出すからです。しかも、我々日本人にとってもありがたいお方であるからです。

原因不明の疫病「うるま病」から逃れて、2年間の流浪生活を強いられた戦後の沖縄県移住者が、やっと安住できたのが現在のコロニアオキナワですが、そこを定住地として定めてくださった方が、Ángel Víctor Paz Estenssoro 元大統領であったからでした。



写真4-1 オキナワ移住地入植50周年の記念事業として建立されたパス元大統領の銅像
中央左から白川光徳日本国大使・稲嶺恵一沖縄県知事・パス元大統領御令嬢・右端筆者
(コロニアオキナワ入植50周年記念誌より)

しかも、現在のボリビア多民族国大統領はRodrigo Paz Pereira様であり、副大臣も同じPaz様だからでした。当然のことながらお二人が偉大な大統領とどういふ関係にあるかが気になりました。

そこで、ボリビア沖縄県人会長の平良輝幸さんに私の勝手な想像をメールで確認してみました。結果は次のとおりでした。

まず、現大統領のRodrigo Paz Pereira様はÁngel Víctor Paz Estenssoroの甥御に当たるJaime Paz Zamora元大統領(1939～1993年)のご子息であり、思ったとおり、Ángel Víctor Paz Estenssoro元大統領のご一族であると言うことで嬉しくなりました。

しかし、同じタリハ県出身ながらPaz副大臣については元大統領と同じ家系であるかは定かではないということでした。タリハ県にはPaz姓がそれなりにあるということです。

副大臣のCarlos Paz Ide様はタリハ県でワイン業界における活動と、公共事業に関し多くの経験を有する方で、今回の任命によりボリビア外交の世代交代と、その豊富な経験を活かし、経済的な展望に重点を置いた外交と、外務省の制度的近代化を推進するなど、大きく期待がよせられている人物」とのことでした。

そして、もう一つ想像をたくましくしたのがIde様という副大臣の母方の姓でした。Ideから井出あるいは井手と日系の苗字を想起しました。そして、私の知っている限りボリビアでの井出または井手姓は旧日本海外協会連合会(旧海外移住事業団の前身の一つ)の現地職員を経てサンタクルス領事事務所に勤めておられた井手昭善さんお一人でしたので、副大臣は、ひょっとしたら昭善さんの娘さんのお子様ではないかと想像したのでした。

私は、出張が多く留守勝ちで、ドロボーに洗濯物を盗まれたこともあり、大型の番犬を欲しいと思っていたところ、狼のような顔をした大きくて、素晴らしく賢いシェパードのダンディを譲ってくれたのが井手さんであったので井手姓には、特別な想いがあったことも大きな要因でした。

ところが、平良輝幸さんからのご返信は全く違っていました。「なお、母方のIdeに関しましては、北ドイツ古北欧を起源とするIDH(活動/労働を意味する)からくるのではないかと、いうふうにネットでは説明しております。つきましては、日本人の子孫ではないと思われます」ということでした。私の勝手な想像はまったくの的外れの妄想の域を出ないものでした。

ところで、話はまったく変わってしまいますが、私の連想は、ここからさらにサンフアン移住地の起源へと飛んだのです。井手さんは西川移民のお一人でした。西川移民とは、まだ、日本とボリビア両国間の移住協定ができる前にボリビアでの精糖工場設立を計画した西川利通氏に従って1955年に移住した16家族87名の人々です。

ところが、精糖工場構想は実現できませんでした。しかし、その直後に日本とボリビア両国間の移住協定が締結され、ボリビア政府から現在のサンフアン移住地27,132haを無償で払い下げを受けます。そのサンフアン移住地の一番手前を西川区と称するのは、これに由来します。

西川区の開墾を始めた人々と精糖工場設立を実現

できなかった西川氏との間に気まずい思いが生じてしまったことは、容易に想像できます。そのため、西川氏ご夫妻はボリビアに連れてきた人々とは袂を分かち、サンフアン移住地に入植せずに、遠く離れたコチャバンバ州に移り住んでいました。

日本国政府は、両国間の移住協定に則ってサンフアン移住地を開発するため、各県の海外協会事務所を通じて、一戸当たり50haを無償提供することを目玉に移民の募集を開始します。また現地では、その受け入れ態勢を作るため旧日本海外協会連合会から宮廣千代蔵・篠崎俊英両氏がサンフアン移住地に派遣され、さらに現地職員として西川移民の井手昭善さんと武田健司さん、そしてボリビア人のヘスス・オスナ氏が採用されました。

「犬も通わぬ」、「緑の監獄」、「ただより高いものはない」とも称されたサンフアン移住地の苦難な開拓の歴史は省略しますが、私がボリビアに旧海外移住事業団の職員として派遣された翌年の1970年に「サンフアン移住地入植15周年」の記念式典が催されました。西川移民を含めサンフアン移住地の人々もなんとかやっていけそうな目途も立ち、また「時がわだかまりを流す」ということでしょうか、その式典に西川利通氏も招待されたのです。



写真4-3 西川利通氏とご家族（左奥はヘスス・オスナ職員の夫人）

西川氏はご家族と共に式典に出席され、西川移民の方々とまさに15年ぶりの再会となりました。おそらく、西

川氏は、自分の責任を感じ重苦しい気持ちでこの15年間に過ごしてこられたのでしょう。それが式典では、サンフアン移住地の創設者として感謝状を贈呈され、ホッとされている安堵の表情が印象的でした。貴重な歴史的資料になると思いシャッターを切ったのが写真4-3です。



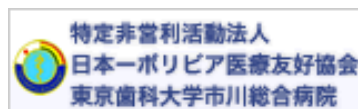
写真4-4 左から石沢美登祭典準備委員長・宮廣千代蔵海外移住事業職員・西由五郎サンタクルス領事・篠崎俊英海外移住事業団職員・井門ラパス日本人会会長・西川利通氏・山根ラパス日本人会副会長（1970年サンフアン移住地で筆者撮影）

（終わり）

編集部

椿 秀洋 細萱 恵子 大川 裕司

◎日本ボリビア協会維持会員一覧◎



Copyright© 2002-2026

一般社団法人日本ボリビア協会
ASOCIACIÓN NIPPON-BOLIVIA
All rights Reserved